



久野 正人
エム・シー・ジー
代表取締役

経済同友会 つながる▶▶

リレートーク #213

ABO雑感



日色 保
ジョンソン・エンド・ジョンソン
取締役社長

日本人はなぜか血液型による性格診断が大好きである。科学的にはすでに否定されており、こんなことで相性がいいとか悪いとか騒いでいるのは、世界的にも珍しい。まあ、特定の属性(例えば性別や出身地など)に思考や行動の傾向を紐付けしたがるのは万国共通だし、私だって学生時代はそんな話で盛り上がることもあった。そういう私の血液型はAB型だ。いや、だった。23歳のとある日までは。

AとBの混在、そして日本人では約一割という希少性とも相まって、AB型はとかく「二重人格」とか「変わり者」と言われがちだ。しかし、この特別感が思春期の過剰な自意識を刺激していた部分もあって、「血液型、ABじゃない? あなた、ちょっと何を考えているか分からない感じだし」なんて女子に言われると、何となくミステリアスな雰囲気を出さなきゃいけないかななどと思ったり。アホですね。

25年以上も前のある日、知り合いからの電話を受けて総合病院に駆け付けた。新生児の緊急手術に際してAB型の血液が必要だから、と。そう、その知り合いは私の血液型がAB型と知っていたのである。ところが、検査のための採血の後、病院から知らされた。「血液型が違います、あなたはA型ですよ」。青天の霹靂^{へきれき}とはこのことである。親からもずっとAB型と言われ、信じて疑わなかったのに。この軽い失望感を伴った驚きは、たぶん、最も一般的な血液型に格下げされた感じからきたのであろう(A型の皆さま、悪気はないです)。

「お前は典型的なAB型だよな」なんて言っていた昔からの友人らにこの顛末^{てんまつ}を話した。「俺さあ、実はAB型じゃなかったんだよ」「マジかよ。で、実際は何型だったんだ?」「A型だとさ」「…そうねえ、うん、お前、確かにA型っぽいところあるよ!」これを機に、一切の血液型による性格診断は信じないことにした。

蛇足だが、駆け付けた総合病院でたまたま出会ったのが、同じく献血に来ていた今の妻(真正AB型)である。私が生まれたときに血液型が正しく判定されていたら…。人生は巡り合わせですね。

▶▶ 次回リレートーク

挽野 元
ボーズ
取締役社長